

日本作業療法士協会 海外研修助成制度

実績報告書

学会名：WFOT Congress 2026

演題名：Survey on the status of regional collaboration among rehabilitation professionals at the time of discharge for people with high medical dependency

会期：2026年2月9日～12日

開催地：バンコク、タイ

申請者

氏名：大寺 亜由美

所属：国際医療福祉大学市川病院

会員番号：20449

所属士会：千葉県

1. 発表演題の概要

学会開催の最終日である2月12日の13時より『Lighting Talks』という3分間の口述発表、1分間の質疑応答の形態をとるセッションで発表をした。概要は以下の通りである。

【背景】進行性神経疾患を中心とした高度医療依存度の高い患者は、病状の進行に伴い生活環境の変化を余儀なくされることが多い。その移行期においては、個々の療法士による断片的な支援に陥ることなく、継続性のある支援体制を整えることが重要となる。特に、病院から在宅へ移行する際には、医療・介護・福祉が連携した統合的支援が不可欠である。しかし、実際の現場では施設間連携の方法や質にばらつきがあり、より効果的な連携のあり方を明らかにする必要がある。

【目的】本邦の首都圏郊外都市における、病院から在宅への移行期にかかわるリハビリ専門職の連携状況を明らかにすることである。

【方法】単一施設を対象とした後方視的横断研究を実施し、リハビリテーション記録を用いて分析した。対象は、ALS（筋萎縮性側索硬化症）46名、MSA（多系統萎縮症）23名の計69名である。研究期間は2021年4月から2025年1月の期間とし、年齢・性別・ADL（Activities of Daily Living）評価、人工呼吸器装着、胃瘻造設、吸引の有無などの臨床データを収集した。また、入院目的により移行期支援が異なると仮定し、入院区分別に地域スタッフとの連携方法を検討した。

【結果】地域連携の方法として、主に三つの特徴が確認された。第一に、リハビリテーションサマリーの活用が広くみられ、患者の身体機能や動作状況をよりわかりやすく伝えるために、写真や動画といった視覚的資料を添付する例も複数認められた。第二に、多職種によるチームカンファレンスが中心的役割を果たしていた。参加者は平均9名、所要時間は110

分程度であり、対面、オンライン、ハイブリッドなど多様な形式で開催されていた。第三に、コミュニケーション支援機器や在宅警報装置などの福祉用具貸与が実施され、在宅療養に必要な環境調整が図られていた。さらに、入院目的別に連携率を比較したところ、治療目的で入院した患者群が最も高い連携実施率を示していた。連携手段として最も頻用されたのは、文書によるリハビリテーションサマリーの提出であった。

【臨床的応用】高度医療依存度の高い患者に対する地域連携には、①複雑なケアニーズを共有するための視覚資料の活用、②多職種カンファレンスと丁寧な退院支援の重要性、③病院の支援により専門的コミュニケーション機器の活用が促進されること、の三点が特徴として示された。本研究は、進行性神経疾患患者の在宅移行期における多職種連携の実態を明らかにし、今後の連携システム構築に有用な示唆を与えるものである。

2. 学会参加と発表の印象

2026年2月9日から12日にかけて、バンコクで開催された世界作業療法学会（WFOT）に参加し、最終日の12日にLightning Talksのセッションにて口述発表を行った。日本は出発直前に降雪があり寒冷、現地は高温多湿という強い気候差があったが、会期中は水分・温度・喉の管理を徹底し、体調を崩すことなく全日程を遂行した。会場は昨年度札幌で開催されたアジア太平洋作業療法学会と比較すると日本人参加者は少なく、やり取りは主として英語であったが、発表以外の短いコミュニケーションも含め多様な実践知に直接触れられる貴重な場となった。

1. 聴講に関する印象記

聴講したシンポジウムの中でも最も示唆に富んでいたのは、「AT provision WFOT symposium: Assistive Technology - stakeholder perspectives -」であった。私は神経難病のコミュニケーション機器導入を日常的に支援している立場から、以下の点は本邦のコミュニケーション機器支援に直結する知見であると感じた。

第一に、福祉用具を「手に入れるまで」のプロセスが成果を左右する点である。患者・家族が迷わずアクセスできる申請・評価・試用のフローを、地域資源と接合させながら構築する必要がある。とりわけ、保健所での特定疾患受給者証発行などと組み合わせ、制度上の流れを明確に可視化し、タイムラインを整備することが重要と感じた。第二に、支援者（臨床家・家族・介護者・教育機関）を「育てる」継続的仕組みの必要性である。本邦においても地域差が課題となりやすいため、どの地域でも実装可能な説明用チェックリスト、トラブル時の連絡系統、定期的な振り返りの仕組みなど、支援者の伴走体制を整えることが重要である。第三に、導入後のアフターサービスの厚みが使用を大きく左右する点である。機器の微調整、保守、消耗品管理、使用状況の可視化（記録・写真・動画）を繰り返していく支援循環を制度横断で構築する必要性を強く感じた。これら三点は、日本の制度環境でも十分に応用可能な実践原則であると考えている。

また、アイルランドの University of Limerick の研究者による、救急部門から退院する高齢者の移行期支援に関する質的研究も印象に残った。関係者間の連携方法の過不足や不足に伴う問題点の例示など実践に役立つ知見が多く示されていた。今後、視覚資料の活用方法に関して自分が抱えている疑問点をメールで問い合せたいと考えており、研究的視野が広がる機会となった。

さらに、学会運営においては環境への配慮が随所に見られた。ネームタグにはプラスチック製の袋が使用されず、抄録冊子も最小限にとどめられ、リサイクル素材が積極的に用いられていた。また、会場内には複数の飲水ステーションが設置され、参加者がマイボトルを利用しやすい仕組みが整えられていた。一方で、ポスターセッションは e-poster の閲覧形式に限定されており、興味を持った演者と直接交流を深める機会を得にくかった。この点は環境配慮によるものか会場規模によるものかは判断が難しいが、今後は対面で議論をしやすいスペースの確保も望まれると感じた。

2. 発表に関して

自身の発表では質問はなかったものの、神経難病が希少疾患であるにもかかわらず一定数の対象者データを有している点に対し、多くの参加者から驚きを示された。この反応を通して、日頃の臨床で蓄積しているデータの価値を改めて認識することができ、今後の研究発展に向けて大きな励みとなった。

3. 国際交流

海外研究者との交流は、会場内での食事の際や軽い会話を中心ではあったが、異なる文化背景や臨床実践に触れる貴重な機会となった。一方で、同じセッションに参加した日本人演者とは共通言語である日本語を通じて研究や臨床について深く議論でき、国内ネットワークが広がるきっかけにもなった。交換した国内外の参加者の連絡先をもとに、帰国後も継続的に情報交換を行う予定であり、臨床・研究双方で連携の可能性が広がっている。

4. 研究の発展性

地域連携を扱った前向き介入研究の発表では、少人数でも質の高い研究を成立させるための工夫が示されており、研究デザインを検討するうえで非常に参考となった。作業療法分野では、患者のナラティブを重視する質的研究と、効果検証を目的とした量的研究が共に重視され、両者が補完し合う学術的姿勢が世界的にも確立していることを再認識した。特に、専門職間の連携プロセスを分析する際には、プロセス指標（連携に要した時間、情報欠落件数、退院後2週間での課題解決率など）とアウトカム指標（再入院、生活自立度、家族負担など）を組み合わせた評価が有用であり、今後の研究に取り入れたいと感じた。

5. 全体を通した感想

総じて今回の国際学会参加は、自身の臨床・研究における課題と可能性を多角的に捉え直す貴重な機会となった。得られた知見を日々の臨床実践に還元するとともに、地域連携体制の改善や研究の発展につなげるべく、引き続き取り組んでいきたい。

3. 文献

Condon B, Griffin A, Fitzgerald C, Shanahan E, Glynn L, et al: Older adults experience of transition to the community from the emergency department: a qualitative evidence synthesis. BMC Geriatrics 24:233, 2024

4. 論文掲載情報（学術雑誌に投稿し、論文掲載された場合に記載）